[別紙 2]

審査の結果の要旨

氏名　　張　雪君

本研究は、上海市と東京都に在住する高齢者のヘルスサービスへのアクセスを比較検討し、さらに両都市の高齢者の病気行動モデルにおける潜在的な要因を明らかにする目的で、人口学的特性要因、利用促進・阻害要因、ニード要因の３要因群から成る Andersen 行動モデルを適用した調査研究である。調査対象は両地域から無作為抽出された 65 歳から 90 歳までの高齢者（上海市 435 人、東京都 414 人）である。

本研究から、以下の知見が得られた。第一にニード要因は両都市に共通な主たる受診要因であったが、上海の高齢者におけるヘルスサービスへのアクセスは東京に比べて不公平であった。とりわけ、この状況は低学歴の人、保険を持たないもしくは条件の悪い保険に加入している人たちに多く見られた。上海のヘルスサービスへのアクセスの公平を確保する上で、適切な保険制度を確立することの重要性が示唆された。第二にいずれの都市においても、高齢者のフォーマルサービス利用とインフォーマルサービス利用の間に補完的な関係があった。また、ソーシャルサポートと同居形態は、高齢者の医療機関への受診を直接的に促進するものではなかったが、就床を代替し（東京）、通院志向を高める（上海）という関連性が認められた。さらに東京では、互恵規範意識が受診についての関連要因であることが初めて明らかになった。

以上、本論文は Andersen 行動モデルを適用して、上海市と東京都に在住する高齢者のヘルスサービスへのアクセスの比較を行い、両都市の高齢者における受診行動の潜在要因を明らかにした研究であり、高齢者の健康政策に重要な貢献をなすと考えられる。よって、学位の授与に値すると考えられる。